
ラブ&デブ

オオハタ ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブ&デブ

【Nコード】

N1314H

【作者名】

オオハタ ユウキ

【あらすじ】

いじめられっこのデブを助けるガリの物語です。二人でイジメに立ち向かっていきます。

窓際の一番後ろ。教室でこれ以上にいい場所などあるんだろうか。窓を開ければ心地よい風が顔を刺激する。何をしても、一番前に偉そうに立って騒いでいる教師にはれる事は無い。昔から運だけはよかったんだ。カンニングをすればそれがすべて正解し、珍しくノートを取れば、そこがテストに出題され。

それだけなら、ああ、今年で高校生活も終わりだなんてしんみりするんだけど、三年の最後に、悲劇は起こった。というか、起きている。俺がここの席に着いたときから、その悲劇は現在進行形で起きている。

蒸気が俺のところまで来ている。もう心地よい風になど興味を持てない。床を蹴る小さな音が、何回も聞こえる。息が荒い。うるさい。暑い。

どれだけ食ったらそんな体になるんだ？ と質問したい。首は存在しない。贅肉が何重にも重なり、学生服が悲鳴を上げるかのようになっている。性別が男というのがせめてもの救いか。その男――豚山ブウ太という名前だ――の周りの景色が、熱気のせいで歪んでいる。こいつが気になって、授業どころじゃない。いや、いつも授業どころじゃないけど。

豚山は、三年も半分を過ぎようとしていた二学期の終盤に転校してきた。学校生活には熱心に取り組んでいるようだ。ノートが汗で湿っている。

「矢背杉！ ヤセスギ ちゃんと授業聞いているのか？」

豚山観察を中年教師の手によって邪魔された俺は、豚山を気にしないように眠りについた。

俺は、少し眠ってすぐに、暑苦しさ目に覚めた。全身に汗が流れている。喉がかわいた。もう一度豚山を観察してみる。俺以上に滝のように流れた汗で、制服の色が変わっている。

「豚山、これ答えてみる」

豚山が当てられたようだ。大きな音が聞こえる。いすから立ち上がったのだろう。ぶふー、ぶふーと声を荒らしながら黒板の方へ歩いていく。豚山が通る度、汗がまわりの机に飛び散った。女生徒はわざとらしく声を荒げ、男生徒は豚山の腹や背中を叩いている。教師が注意するが、誰の耳にも入らない。

「すみま……わか……」

「お前ははつきりしゃべれないのか！ だからお前は——」

気がつく俺は、教師の目の前にいた。右手が勝手に教師の頬に向かっていく。止めることはできなかった。二発、教師の頬にヒットした。勢いよくひざをつく教師。それを見下ろす俺。そこで意識は俺に戻った。

教師に暴行をしたということで、俺には三日間の停学という処分が下された。自分で言うのもなんだが、成績は上のほう、授業もまじめ——ただ寝ていただけだが——そういう生徒が、なぜ暴行を働いたのか。理由は言わなかった。というより、自分でもわからなかった。優秀生徒ということで、処分は他の生徒より緩やかに収まったのが、俺の運のいいところと言えよう。

親は俺に何も言わず、そして俺も何も言わず、停学中は家に引きこもっていた。することもなく、ただ毎日暇をつぶしながら、停学期間を全うしていた。

そこへ、豚山が訪ねてきた。気負いがあつたのだろう。あいつが教師に絞られているときに、俺が教師を殴ったのだから。俺は、自分の家に知り合いを入れたことは無かった。ましてや、自分の部屋など。しかし、なぜか豚山を追い返すことができなかった。今、俺の部屋に豚山がいる。手土産を持ってきているようだ、差し出すことも無く、そしてすることもないので床に座っている。

「今日は何か用があつて来たんじゃないのか？」

俺が話しかけるが、豚山はうつむいたまま小さい声でぶつぶつとつぶやいている。

「聞こえねえんだよ！」

イライラをぶつけるが如く、俺は豚山を怒鳴り散らした。手は出ていない。

「僕のために先生を殴ってくれたの？」

豚山が、やっと聞こえる声を出した。俺はため息をつきながら、煙草を手取る。火をつけ、一度煙を出したところで、豚山を見た。違うんだよ、デブ。何で俺がお前なんかのためにわざわざ危険を犯さなけりやならない？ ただ単にあの教師には腹が立ってたんだよ。調子乗ってんじゃねえぞデブ。殺すぞ。

「……あの教師は前からむかついてたんだ。それだけだ」

「でも、ありがとう。僕は駄目な奴だから……体はでかいくせに、気は小さくて……クラスメイトから何を言われても、言い返すことができなかったんだ」

気がつく俺は、豚山の襟をつかんでいた。

「だからお前のためじゃないって言ってるんだろ！ 駄目って言うなら、自分から変われよ！」

俺が襟から手を離すと同時に、豚山が泣きそうな顔でこっちを見た。

「そう……わかってる。変わらなきゃいけない。でも、一人じゃ怖い……一人じゃ怖いんだよ！」

「学校って楽しいか？」

「……楽しくは無いよ。でも、好きな場所はある。海の方こうが見える場所なんだ。そこにいる時だけ、僕はいろんなものから救われる……」

その後少し雑談をして、豚山は帰っていった。

クソ。俺が停学になったのは、あいつの為だったのか？ ふざけんな。

俺は豚山の置き土産であるハム、ソーセージの詰め合わせを台所へ持っていくと、まだ早かったが部屋の明かりを消し、眠りについた。

次の日俺は、電気屋に行った。そこでいろいろなものを買って、また一日が終わった。

停学期間は、あっという間に終わってしまった。俺は、電気屋で買ったものをポケットに入れた。何事も無かったかのように登校した。何も変わらない、そう思っていたのは杞憂だったのだろうか。

教室へ入るなり、真っ先にクラスメイトたちの視線が俺に突き刺さった。特別仲がいい奴なんていなかったが、別段忌み嫌われていたこともなかった。しかし、クラスメイトの視線が気になる。机に向かった俺は、目の前が真っ白になった。机には、ありきたりな悪口が、彫刻刀で彫られていた。それも一つじゃない。一面びっしりに。俺は、落ち着きを取り戻しながら、目で豚山を探した。しかし、いない。普通ならここで怒鳴り散らし、犯人を探し出して罰を与えるのだが、なぜか豚山が気になった俺は、教室を飛び出した。

豚山が教室を出ることなどありえない。しいて言えばトイレぐらいだろう。しかし、トイレにもいない。念のため三年の教室すべてを見回る。しかし、ない。図書室、保健室、職員室と順に見ていくが、豚山の姿は無かった。

「おお、矢背杉。停学は終わったのか？」

俺が殴った教師が、口元に気持ち悪い笑みを浮かべながら近づいてきた。今はお前なんかの相手なんかしてられない。しかし、また厄介を起こして退学になってしまったら、学校へ入った意味が無い。俺は、焦る気持ちを抑えながら、教師に挨拶をした。

「まだ腫れてるんだよ、頬」

と言いつつ、教師が自分の頬をさする。たぶん何ともなっていないのだろうが、重症に見せかけるためにガーゼを張っている。そのさすっていた手が、俺の方をつかんだ。

「覚えとけよ。この痛み、忘れないから……三日の停学処分なんか軽すぎる。お前にはもったい——」

俺は教師の股間を蹴り上げ、その場を後にした。

学校は探し終えた。後は外だけだ。靴を履き、体育館の方へ向かう俺の耳に、乾いた音が聞こえた。二発、三発と続けざまに聞こえる。

音は体育館裏から聞こえていた。少し顔を出し、様子を伺う。厄介になりそうなら立ち去ればいい。

名も知らない男子生徒が、数人の男に囲まれていた。数人の男は、わかるがわるに男子生徒を殴っていた。立ち去るはずの俺が、気づけばその男子生徒の前に立っていた。殴っていた一人が、俺に気づいたらしく、近づいてくる。いかにも不良といういでたち。体型も俺より数段にでかい。突然、耳元で音が鳴り響いた。そのまま後ろへ吹っ飛ぶ。

「何だデメエ？ 正義のヒーロー気取りか？」

俺は、倒れたまま一人を睨み付ける。

「何だその目はア！」

「こいつ、あれですよ。俺たちの肉ペットに近づいてきてる男ですよ。最近停学になった」

「デメエか……二度も俺たちの邪魔をしゃがって。ちょっとお勉強が必要みたいだな。やれ！」

時代劇みたいだな、なんてのんきに構えている俺の顔を、不良の一人が思いつき蹴り上げた。一瞬目の前が光った。そのまま土の上に吹っ飛ぶ。口の中に血の味が広がる。顔一面に砂をかぶった。痛みのせいで起き上がれない俺の腹に、また蹴りが入った。それも一発ではない。気を失おうにも、次々と体に痛みがほとばしる。

「うごあッ……」

胃液が口から出てくる。不良の一人の足が、俺の顔の上で止まった。そのまま振り下ろして顔を踏みつける気だろう。俺は痛みに耐えながら、砂を不良の一人の顔にまいた。

「クソ」

砂が目に入ってもだえる不良の一人の股間を蹴り上げ、うずくまったところであごに膝を入れた。気持ちのいいくらい後ろへ吹き飛

ぶ不良の一人。まずは一人片付けた。あとは……四人。

「デメエ何してんだ！」

怒りに我を忘れた不良デブが、重たい体を引きずりながら俺にパンチを浴びせてくる。そのスローパンチを難なくよけた俺は、後頭部に思いつきり肘を入れた。下手すりゃ俺は殺人者か？

デブは倒した。しかしまだ終わらない。三人揃って襲い掛かってきた。ヒョロ眼鏡、筋肉質、巨人。俺が眼鏡を相手している隙に、背中に筋肉質のパンチが入った。息ができない。動けない俺のおでこに、眼鏡の頭突きが入った。眼鏡が横にどいたと同時に、巨人の蹴りが頬に入る。俺はそこで気を失った。

目が覚めたところは、保健室だった。全身に痛みが走る。俺は、唯一痛み無く動く首を傾け、時計を見た。まだあれから一時間しか経っていないようだ。

「矢背杉君、一体何があつたの？」

保険の教師が、俺の体を触りながら聞いてくる。確か年齢は二十四だったか。背が低く童顔なため、ほかの生徒から人気があるとか保健室を見回してみても、それ目当てとしか思えない男子生徒が見られた。

「いや何も。今日は帰りますわ」

俺は、保健の教師の手を払いのけ、保健室から出た。体中が痛い。俺は痛い体を引きずりながら、教室へと戻る。豚山がいれば、帰ろう。元はといえば豚山のせいでこうなつたんだ。今になつてはどうでもいいけどな。

教室にはいなかった。クラスメイトが突然姿を消したにもかかわらず、いつもどおりの光景が目映った。教師と目があう。俺はそのまま教室を出た。

豚山が行きそうなところ……もうほとんど探し終えたはずだ。俺は下駄箱へ急ぎ、豚山の靴があるか確認した。靴はあった。ということは、まだ校内にいる。豚山の行きそうな所……豚山は何か言っ

てなかったか？

「そうか」

俺は、重たい体を無理やり動かし、階段を上った。

屋上の扉を開ける。やはり、豚山がそこにいた。立ったまま外を眺めている。

「豚山、何、してんだ？」

痛みのせいで声が上手く出ない。

「矢背杉君……」

豚山は、こっちを見ようとはしない。

「やつ、矢背杉君、ご、ごめんね……」

豚山の声は、すぐに嗚咽に変わった。俺は、体の痛みも忘れ豚山のほうに近づいていく。

「来ないで……」

「見てたのか？」

教室での俺への仕打ち、体育館裏でのリンチ。すべて豚山に見られていたということか。それを豚山は自分のせいだと、己を責めている。

「全部、見てた。僕と仲良くなかったからだ……」

「単に、あいつらが……気に入らな、かっただけだ。ああいうじめ、俺は嫌いなんだ。それより豚山、保健室に行か、なくても大丈夫か？」

といいながら、俺は豚山の肩を触る。豚山は俺の手を思いつきり払いのけ、涙でぐしゃぐしゃになった顔を俺に向ける。

「僕に……僕にもうやさしくしないでくれ！」

豚山は、屋上から飛び出していた。豚山を追いかけてようにも、体が言うことを聞かない。もう、動けない。あの集団につかまらなければいいが。俺はもうここから出られそうに無い。

屋上の階段から足音が聞こえてきた。誰かが来たんだろう。豚山か？ 豚山ならいいのだが。

「矢背杉イ」

スーツ姿の中年が姿を現した。全ての元凶。俺と豚山を滅茶苦茶にした――

「クソ教師！ な、何しに来た」

「クソ教師？ ちゃんと名前で呼んでもらいたいなあ。矢背杉君ツ！」

クソ教師のつま先が、俺の頬に入った。歯が何本か抜けた。同時に、口元から血が大量にたれてきた。俺は、死ぬのか？ おかしい。何かがおかしい。なぜ俺は、学校の教師にリンチされなきゃいけないんだ？

「クククク……その目、その目だ！ おびえる目。いつもなら強氣に出られる人間を、痛めつける。これぞ快感……」

言いながら、屋上の鍵を閉めた。助けは呼べない、か。

「おい、クソ教――」

座り込んでいる俺の腹に、クソ教師の足がめり込んだ。胃の中身がすべて出た。もう胃液しか出ないのに、口からはずっと吐く音が聞こえる。

「名前で呼んでもらいたいなあ、矢背杉イ！」

こいつの名前？ そんなの覚えていないぞ。豚山しか覚えていない。

「……教える」

「さど えすひこ佐渡江州彦だ」

「佐渡さんよ、俺が豚山と仲良く、しているのがつ、そ、そんなに目障、りか？」

恐怖か、痛みか。少し前よりいっそう声が出づらくなっている。

「ああ。かなりな。なんたってあいつは、入学してから今まで俺のペットだったからな」

「お前だけなのか？」

「体育館裏でお前をリンチした奴は、俺が単に雇っただけだ。まあどのみち豚とは関係なく、いつかはリンチしたいとは思ってたがな」

俺は、佐渡が自分語りをしてこつちを見ていないうちに、ポケットを探った。

「何でだ？」

「お前、俺のタイプなんだよお。豚にも飽きた所だったし、そろそろペットを変えてもいいかなあと思ってたんだ」

佐渡が、俺に抱きついてきた。抱きついたまま、俺の顔を殴る。腹も殴る。途中で気を失った。

屋上では俺が、体育館裏では豚山が――豚山いじめは、佐渡以外にも広まったようだ――、リンチをされ続けていた。

そして、それが終われば二人で家路に着く。その繰り返しだった。俺たちは学校を休むことも無く、ただ毎日殴られ続けた。他人事のように言わなければ、俺たちの何かが崩壊しそうだった。殴られているときは、意識など無かった。

気がつけば、もう卒業間近になっていた。なれば、嫌なことでも時間がたつのは早い。途中から外見の怪我が目立つようになってきたため、リンチの路線を変えたからだろうか。俺にはわからない。ただ、俺たちはその頃になれば、そのリンチが快感に変わっていた。いや、違う。快感だと思わないと、自分が壊れてしまいそうだったんだ。

放課後、プレイが終わって豚山と二人道を歩いていた。車はめったに走らない。

「矢背杉君、知ってる？」

「何だ？」

「佐渡、今度教頭になるんだって」

「教頭？ 教頭っつーより亀頭だろ。何度あいつのあれを見てきたか」

「クビにしてやりたい……」

「まかせとけ。案はある」

「ほんと？」

豚山が立ち止まって、最近には見せなかった満面の笑みを浮かべた。

「決戦の日は卒業式本番だ。あれなら偉いさんも来るから」

「わかった。その日まで我慢しておくよ」

「おう。じゃあな、俺はこっちだから」

といって、豚山と分かれた俺は、すぐ近くにあるアパートの自分の部屋に入るなり、パソコンを開いた。俺の部屋は、男の一人暮らしにしては質素だった。あるのはパソコンとテレビ、冷蔵庫しかない。

俺はその日から卒業式本番まで、休みを取った。豚山にも連絡をしていた。豚山も休んだようだった。

もつやることは決まっている。俺は、数週間前から、職員室のパソコンにハッキングをかけていた。少しずつ少しずつ、佐渡のパソコンから歴代のペットの画像をコピーし、俺のパソコンに保存していった。その中には、動画まであった。編集処理がしやすいように学校におきっぱなしにしていたのが仇になったようだな。

その画像や動画を、職員室においてあるすべてのパソコンの中に保存した。そう簡単に見つかり、この後の工程が台無しになる。後はこいつだ。俺は、ポケットの中から機械を取り出した。

次の日の早朝、俺は機械を手に持ち、学校へと急いだ。早朝とはいえ、朝練している部員などはちらほらと見受けられた。俺はその横を通り過ぎ、体育館の中へ入った。そのまま放送室へと急ぐ。俺はポケットからレコーダーを取り出すと、卒業式に流れる曲とレコーダーの中身を交換し、素早く体育館から抜け出した。

「あー！」

体育館から抜け出したところで、保健の教師と出会ってしまった。何でこんな早くに学校来てんだよ。

「矢背杉君、最近学校来てなかったようだけど、何かあったの？」

「何かあるから休むんだろ。佐渡にでも聞いてみな」

目がはてなマークになっている保健の教師をそこに放置し、俺は

教室へと帰った。

豚山は来ていた。俺は目だけで合図し、同じように豚山もそれを返した。あとは本番を待つだけ。しかし、そう簡単にはいかなかった。

本番。体育館の明かりが落とされ、俺たち卒業生が入場する。端の教師の席には、佐渡もいる。見てろ。もうすぐお前に復讐する。

もうすぐ音楽が鳴り出すだろう。しかし、曲はならない。お前のやってきたことすべてが、全校生徒、そしてPTA、教師たちに晒されるんだ。俺は席に着きながら、その時間をじっと待っていた。

音楽ではない、何かの音が聞こえてきた。ざわつく周りを横目で見ながら、俺は、至福のときを過ごす。流れ出すぞ。この日のために、俺はレコーダーに佐渡のすべてのせりふを記録しておいたんだ。

『みなさん』

こんなセリフあったか？ 佐渡の言葉しか入っていなかった気がするんだが。ざわつく生徒。教師たちは、お互いの顔を見合いながら、何が起こったのか話し合っている。

『僕、豚山ブウ太は、今まで人の言いなりになる人生を送っていました。クラスメイトにはいじめられ、暴行され、信頼していた先生からも暴行を受け続けていました。誰も僕には話しかけなかった』

周りを見る。豚山がいない。あれはテープじゃない。豚山自身が、放送室から流しているんだ。

『それが誰かは言いません。いまさら復讐しても、仕方が無いから……それに、僕は大切なものを得ました。矢背杉君です』

俺の周りが明るく照らされる。体育館の上から、誰かが俺に丸いライトを向けた。まわりの生徒は、俺を凝視する。どうなってるんだ？ わけがわからない。

『僕は、矢背杉君にお礼を言いたいです。本当にありがとうございます。僕を助けてくれて。そして、僕の変わりに教師から暴行を受けてくれて。僕はそれだけで満足です。君がいたから、今まで生きてこられました。君と過ごした時間は、忘れません。僕の人生は、君と出会った

めにあつたようなものです。本当にありがとう。さようなら」

放送が終わると同時に、俺を照らしていた明かりに、影が映った。数人の生徒が、悲鳴を上げる。俺は明かりを見上げた。豚山がいた。今までの暴行の数々を露出するかのように、裸になって、明かりの前で。首の、ロープが。豚山は肉を揺らし、宙を舞っている。俺はそれ以上見ることはできなかった。俺はポケットからナイフを取り出し、佐渡の元へと走った。教師たちの制止に必死になりながら、俺は佐渡の前に立ち、自分の喉をかききった。血が大量に噴出し、佐渡の全身にかかる。佐渡は、俺を呆然と眺めていた。

(後書き)

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1314h/>

ラブ&デブ

2010年10月8日14時30分発行